

谷にうたう女

小川未明

青空文庫

くりの木のこずえに残った一ひらの葉が、北の海を見ながら、さびしい歌をうたっていました。

おきぬは、四つになる長吉をつれて、山の畑へ大根を抜きにまいりました。やがて、冬がくるのです。白髪のおばあさんが、糸をつむいでいるように、空では、雲が切れたり、またつながったりしていました。

下の黒土には、黄ばんだ大根の葉が、きれいに頭を並べていました。おきぬは子供がかげぎみであることを知っていました。持つてくるはずのねんねを忘れてきたのに気がついて、

「長吉や、ここに待っていて、母ちゃんは、すぐ家へいっ

てねんねこを持ってくるからな。どこへもいくでねえよ。」

子供は、だまつて、うなずきました。

おきぬは、ゆきかけて、またもどつてきました。

「ほんとうに、どこへもいくでねえよ。そこにじつとして待つていれや。」

そういつて、彼女は、坂道を駈け下りるようにして、急ぎました。

あたりには人の影もなかつたのです。くりの木のこずえに
ついていた枯れた葉は、今夜の命も知らぬげに、やはり、ひらひらと
して、風の吹くたびに歌をうたっていました。そしてふもとの水
車場から、かすかに車の音がきこえてきました。

すこしの間あいだが、小さな長吉ちようきちにとつては、堪たえられないほどの長い時間ながじかんでした。

「おつかあ。」といつて、子供こどもは、母ははを呼よんで泣なき出だしました。しかし、いくら呼よんでも、この子供こどもの声こゑは、下したの村むらへは達たつしなかつたでありましょう。

このとき、どこからか、笛ふえと太鼓たいこの音おとがきこえてきました。それは、村むらの祭りまつのときにしかきかなかつたものです。山やまの林はやしに鳴なく、もずや、ひよどりでさえ、こない声こゑは出だし得えなかつたので、長吉ちようきちは、ぼんやりと、その音おとのする方ほうを見みると、山やまへ登ぼつてゆく道みちを、赤あかい旗はたを立て、青あおい着物きものをきた人ひとたちが列れつをつくつて歩いてゆきました。そして、その後あとから、にぎやかな子供こどもた

ちの話はなし声こゑなどがしてくるので、泣なくのを忘わすれて見みとれていると、葉はの落おちて、裸はだかとなつた林はやしの間あいだから、その列れつがちらちらと見みえたのです。長ちようきち吉きちは、いそいで、その後あとを追おいかけました。

二、三度ども彼かれはころんだけれど、泣なきもせずその後あとを追おいかけ
てゆきました。

空そらで、糸いとをつむいでいた、白しら髪がのおばあさんの姿すがたが見みえなくなつて、風かぜが募つつてきました。おきぬが畑はたけにもどつてきたときには、くりのこずえにしがみついて歌うたをうたつていた葉はが、くるくるとまわつて、がけの底そこの方ほうへ落おちていったのです。

「長ちようきち吉きちや、長ちようきち吉きちや、長ちようきち吉きちはどこへいったらう？」

彼かの女じよは、あらしのうちを、さがしまわりました。

やま うえ
 山の上へとつづいている道は、かすかにくさむらの中に消えて
 いました。そして、山の頂は灰色に曇つて、雲脚が、速かつ
 たのです。

むら
 村じゆうが、大騒ぎをして、長吉をさがしたけれど、つ
 いにむだでありました。年寄りたちは、

まえ
 「前にも一度こういうことがあつた。人さらいにつれていかれた
 か、たぬきにでもばかされたのであろう。」と、囲炉裏に粗朶を
 たきながら話しました。

のち
 それから、後のことです。村の人たちは、髪を乱して、素足で
 うたつて歩くおきぬを見ました。

「ねんねん、ころころ、ねんねしな。

なかなで、いい子だ、ねんねしな。」

子供を失った悲しみから、気の狂ったおきぬは、昼となく、夜となく、こうしてうたいながら、村道を歩いて山の方へとさまよっていました。

村にあられが降り、みぞれが降りました。そして、山に雪がくると、いろいろの小鳥たちが、里を慕って下りるように、村の娘たちもまた都会を慕ったのです。おかよは、こうして彼女が十六のときに奉公に出ました。

旅に立つ前夜のこと、うれしいやら、悲しいやらで、胸がいつぱいになつて、戸の外にすさぶあらしの音をきいていると、ちようどおきぬの前をうたつて通る、子守唄が、ちぎれちぎれに耳

へ入はいったのでした。なんという、いじらしいことかと、彼女かのじよは
 おとめおとめころ少おとめ女ころ心こころにも深ふかく感かんじたのでありました。

つきひ 月つきひ日は、足あし音おとをたてずあしおとにすぎあしおとてゆあしおときました。

くりの木きのこきずえで、海うみの方ほうを見みながら、歌うたをうたうたつていた枯か
 れ葉はも、いつか地ちに落おちて朽くちてしまえくば、村むらを出でたおかよは、
 もう二年ねんもたねんつて、すねんつかり都みやこのふみやこうにそみやこまつたころです。

ある日ひおかよは、お嬢じょうさまのおじょうへやへ入はいると、ストーブの火ひが
 燃もえて、フリーズはなアの花かおが香かほり、そのうちはなは、さかほながら春はるのよう
 でした。そして、蓄ちく音おん機きは、静しずかに、鳴なりひびしずいていました。
 しばらく、うかつとりとして、彼かの女じよはお嬢じょうさまのそじょうばで、その音おと
 にききとれていおとると、目めの前まえに広ひろ々びろとした海うみが開ひらけ、緑みどり色いろ

の波なみがうねり、白馬はくばは、島しまの空そらをめがけて飛とんでいる、なごやかな景色けしきが浮うかんで見みえたのであります。

お嬢じょうさまは、窓まどのところへ歩あゆみ寄よると、はるかに建たてもの物の頭あたまをきれいに並ならべている街まちの方ほうをごらんになりました。そして、自分じぶんでも、その歌うたの一節せつを口くちずさみなさいました。

「ねえ、おかよや、おまえ、この子守唄こもりうたをきいたことがあつて？」といつて、箱はこの中なかから一枚まいのレコードを抜ぬいて、盤ばんにかけながら、

「私わたしは、この唄うたをきくと悲かなしくなるの、東とうきよう京きやうに生うまれて、田い舎なの景色けしきを知らしないけれど、白壁しろかべのお倉くらが見みえて、青あおい梅うめの実みのなっている林はやしに、しめつぽい五月がつの風かぜが吹ふく、景色けしきを見みるよう

な気がするのよ。」といわれました。

やがて、蓄音機ちくおんきのうたい出したのは、

「ねんねん、ころころ、ねんねしな。

坊ぼうやは、いい子こだ、ねんねしな。

……………」

という、子守唄こもりうたでありました。

おかよは目めに涙なみだをうかべて、きいていました。哀あわれな、子供こどもを失うしなつて気きの狂くるつた、おきぬのことを思おもい出だしたからです。

「どう？ あんたが泣なくくらいだから、やはりいいんだわ。この声せい楽がく家は、有ゆう名めいな方かたなのよ。」

「いえ、お嬢じょうさま、どうか、今年ことしの夏なつ、私わたしの生うまれた村むらへいらし

てください。谷にはべにゆりが咲いていますし、あの悲しい子
守唄をおきかせしたいのでございますから。」

おかよは哀れなおきぬの話をしてきかせたのでした。

都会で、はなやかな生活を送っていらつしやるお嬢さまは、

高い窓からかなたの空をながめて、遠い、知らぬ海の向こうの国
々に

々のことなどを、さまざまに想像して、悲しんだり、あこが

れたりしていられたのですが、いま、おかよの話をしきくと、この

ところへは、ほんとうにいつてみる気になりました。朝、汽車に

身を委せればその日の中にもおかよの村へ着くのだから。

また、月日は、足音をたてずに、とつとと過ぎてしまいま

た。

地球の上は、やわらかな風と緑の葉に被われています。うぐいすは林に鳴いて、がけの上には、らんの花が香っていました。気の狂ったおきぬは、その後、すこしおちついたけれど、もうこの村には用のない人とされて、山一つ越した、あちらの漁村の実家へ帰ってしまったそうです。

「お嬢さま、せつかくおつれもうして、あの女のうたう子守唄をおきかせすることができません。」と、おかよは、なげきましました。それをききたいばかりに、わざわざここまで旅行をしたお嬢さまの失望を思ったからです。

しかし、お嬢さまは、都にいらしたときのように、ここへきても笑っていらつしやいました。

「だけど、いいわ。ここへやってきたかいがあつてよ。山も谷も、
 私が、夢で見たよりか美しいんですもの。」

このとき、谷で鳴くうぐいすの声がかすかにきこえてきました。そして、がけの上では、らんの花が咲いて、今朝から、金色の羽を輝かしながら、小さなちが、幾たびもそのまわりを飛んでいたのでした。

「まだ、あちらの山には、雪が光っていること。」と、おかよが、ぼんやりと、その方に見とれていたときでした。

「ねんねん、ころころ、ねんねしな——。」

彼女は、たちまち谷に起こる、きき覚えのある、おきぬの声をきいたので、びっくりしたのです。

しかし、それは、そうでなかった。なにか美しい花を見つけて
草のしげった、細い道を下りていった、お嬢さまが、高らかにう
たった歌の声だったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「谷《たに》にうたう女《おんな》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

谷にうたう女

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>